

ドイツ現代史研究の卓越化と越境化 ——石田勇治先生を送る——

森 井 裕 一

石田勇治先生のお姿をキャンパス内で初めて遠くから拝見したのは 1989 年だったと思う。石田先生は大学院重点化前の教養学部で 1989 年 4 月に奉職され、同じ年に私は大学院総合文化研究科の旧国際関係論専攻の修士課程に入学した。当初石田先生は国際関係論専攻の授業担当はしておられなかったのですが、大学院のゼミに出席させていただいたのは博士課程に進学してからだったと思う。ごく短い期間であったが、興味を持てるドイツ関係の授業が他には少なかったため、とても貴重な時間だった。1992 年に駒場キャンパスで日本国際政治学会の秋期研究大会が開催されたとき、石田先生はコール＝ゲンシャー政権の外交政策について報告されていたことからわかるように、当時はドイツ現代史を核としながらドイツ政治・外交論に近いところまで研究対象にしておられたので、私も多くのことを石田先生から学ばせていただいた。

1999 年夏頃、ふらっと訪れた駒場キャンパスで私は全く偶然に石田先生にお目にかかり、近況を話しているうちにヨーロッパ統合・EU 研究関係で人を探していることを知り、その結果私は駒場でお世話になることになった。人事プロセスの最後には麻生建先生とお二人で筑波大学まで割愛人事の挨拶に来ていただいたご恩に何ら報いることができないまま、20 年以上過ぎてしまった。

石田先生は 1990 年代末には研究対象を大きく広げて、比較ジェノサイド研究、ホロコースト研究に向かって行かれた。特に日本学術振興会 (JSPS) の人文・社会学振興プロジェクト「「ジェノサイド研究」の展開」では大きなチームを組織し、ドイツ現代史の枠組みを大きく超え、多様な比較対象を扱うグローバルなジェノサイド研究を精力的に推進された。その成果は卓越した多くの刊行物に結実している。その後はさらにシンティ・ロマと呼ばれる民族的少数派に対する歴史研究を展開し、近代国家や社会の多数派が偏見に基づき敵対的な行動をとる現象の分析から、市民社会の包摂と排除の原理という大きな研究対象に取り組まれた。

ナチ期前後のドイツ現代史研究に関するご業績では余人の追隨を許さないものがあるが、石田先生のドイツ現代史研究へのご貢献の大きさはご本人の研究のみならず、多くの研究者を育成されたことにこそあるのではないかと私は思う。石田勇治先生が指導教員として指導して完成された博士論文は数多く、かつての多くの指導学生が現在では各地でドイツ現代史研究者としてめざましい活躍を見せている。

数多くの博士論文を指導された背景として言及しておかなければならないのが、日独共同大学院プログラムである。JSPS とドイツ研究協会 (DFG) の共同事業として開始され、日独の大学が共同で博士課程学生を指導するプログラムに初年度の 2007 年から採択された「人文社会科学における大学院教育の国際化のための日独共同教育体制の整備」は、2012 年度から「学際的市民社会研究に向けた日独共同教育体制の確立」に引き継がれ、10 年間にわたって日独の学術振興機関から支援を受けて博士課程教育を飛躍的に活性化させた。

このプログラムは両機関からの財政支援が終了した後も、総合文化研究科内の博士課程教育プログラム「日独共同大学院プログラム」として継続されている。大学教育の国際化、卓越化が求められて久しいが、石田先生がハレ大学の先生たちと共同して構想し、長年にわたって運用されているプログラムは、博士課程の学生を相互に恒常的に派遣し、授業やセミナーを有機的に組み合わせて濃厚な指導を双方の大学が共同で行うものであり、博士課程教育の制度的な国際化の模範例と言える。このプログラムを利用することによって、学生たちは早い段階からドイツでの演習の議論、ドイツ語での研究発表などの機会を得て、その後の国際的な活躍の基盤としてきた。ハレ大学の先生方との厚い信頼関係が研究の共同指導の背景にあるが故に、このプログラムは当初想像もつかなかったほど安定的に、大きな成果をあげることができたと思うが、まさにその中心軸となったのが石田先生であった。

日独共同大学院プログラムはドイツ・ヨーロッパ研究センター (DESK) を活動の基盤としていたが、石田先生はこのセンターの運営にも長年センター長として尽力された。ドイツ学術交流会 (DAAD) が 2000 年に設置した寄付講座の運営からはじまり、その改組後に研究科内センターとなった DESK を教育プログラムと有機的に組み合わせることによって、卓越した歴史教育、国際的で学際的な研究指導を実現し、多くの素晴らしい研究者を生み出してこられた。日独共同大学院プログラムの本体は博士課程の学生が対象であるが、関係するセミナー等では DESK に関係する優れた学部学生、修士課程の学生にも参加する機会を与えて、駒場のヨーロッパ研究に非常に裾野の広い教育効果を与えた。こうしてさまざまな制度的基盤を整備して、石田先生が駒場のドイツ・ヨーロッパ研究と教育のあり方と、その高度化に与えた影響は計り知れない。

これほど研究・教育で活躍された石田先生であるが、2016 年度と 2017 年度の 2 年間は地域文化研究専攻長としても活躍された。私も石田先生の 2 代後に専攻長を務めさせていただき、その仕事の難しさと孤独感を実感させられたが、専攻長という学内業務をこなしながら、石田先生はどうやって多数の学生の博士論文指導をし、研究を推進していらしたのか、私にはとても想像できなかった。石田先生の専攻長時代には、いわゆる駒場北地区の再開発という難しい議論でキャンパス内が騒然としていたが、日々の業務や人事をつつがなく遂行しながら、地域文化研究専攻を円満にまとめておられた。

研究でも、教育でも、学内行政でも、卓越した国際的成果をあげた石田先生が駒場を去られることは寂しくてならないが、今後はより自由に研究活動でご活躍されて、駒場の研究・教育に刺激を与えて下さるものと期待している。深いお礼の気持ちをもって、ご健康と今後ますますの活躍をお祈りいたします。

